

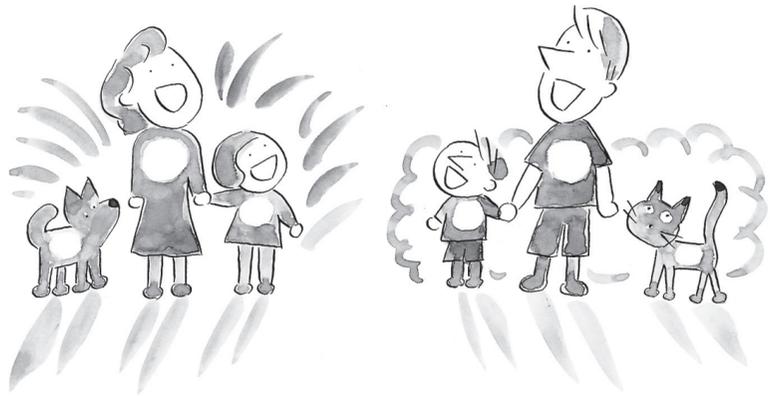
# 因

しん じん しょう いん

# 信心正因

— 聞いたよび声そのま信に —

浄土真宗のみ教えを伝えるためのキーワード、「信心正因」「称名報恩」「二種深信」について解説します。筆者は、本願寺派総合研究所の満井秀城副所長です。今号は「信心正因」です。



え/ひじ みえ

## み教えの言葉を学ぶ⑧

「信心」？「念仏」？両方？  
宗派で異なる浄土往生の正因

浄土真宗の安心は、「信心正因」「称名報恩」です。なぜ、そう言うと思いますか。それは、阿弥陀さまの第十八願から来ています。第十八願とは、

設我得仏、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺、唯除五逆、誹謗正法。

の漢字にして36文字ですが、ここでは、私たち十方の衆生において、至心信樂欲生の「信心」と「乃至十念」の「称名念仏」以外には、往生(若くは生者不取正覺)の因については何もありません。すなわち、私たちは、「信心」と「念仏」以外には、何の用もないということです。仏道修行者の規範である「戒律」も、精神を統一し安定させる「禪定」も一切関係ありません。このことを『數異抄』第十二条では、

本願を信じ念仏を申さば仏に成る。そのほか、なにの学問かは往生の要なるべからず。『註釈版聖典』(88頁)と示されています。第十八願の願事(誓われている事柄)は、「信心」と「念仏」の2つですから、私が阿弥陀さまのお浄土に往生するための正因について、理論的には

満井 秀城



本願寺派総合研究所副所長

次の3通りしかありません。

- ①信心が正因、②称名(念仏)が正因、③両方必要の3つです。選択肢としては両方不要もありますが、それなら誓われる必然性はありませんから、これは除外されます。

そうした時、私たち親鸞聖人の御一流は①信心正因で、②の称名正因は、浄土宗、西派など、③の両方必要は、蓮如上人と同時代の真盛上人(現在の天台真盛宗)などです。つまり、浄土教の流れを汲むあり方は、右の3通りしかありません。また、これを正因とするのでそれが分かれます。

なお、浄土真宗ではなぜ信心が正因となるかについては詳しい説明を要しますが、字数の関係上ここでは割愛させていただきます。興味のある方は、勸学寮編『新編安心論綱要』(本願寺出版社刊)などをご覧ください。

### 仏教は因果の道理が基本

阿弥陀さまから届けられる「信心

その上で、時折、次のような疑問を聞くことがあります。「絶対他力で無条件の救いなら、どうして信心という条件があるのか」と言うのです。皆さんだったら、どう説明されますか。私だったら、「信心も必要でなければ、それは仏教ではない」と答えます。

仏教は因果の道理が基本で、これを外れたら仏教ではありません。因果の道理では、自分の仏果(仏に成るといふ結果)には、自分の側に仏因(仏になる原因)がなければなりません。お腹が空いたけど忙しいから代わりに他人に食事してもらっても、私は満腹にはなりません。これで満腹になったら、「他作自受」という外道になってしまう。

しかしながら私たちは、仏因になりうるものは何ひとつ持ち合わせていません。迷いの元なら、いくらでも作っていますが、仏因になるものは何もないのです。そのような私たちに、仏因となりうるも

のは、阿弥陀さまから届けられる「他力回向の信心」とするのが、「信心正因」の法義です。念のために言えば、この他力回向は、決して他作自受の外道ではありません。それは私たちに仏因を届けることこそ、阿弥陀さまのさとりの内容とされているからです。このことは『仏説無量寿経』(大經)の構成が、衆生往生の因果が、弥陀成仏の果の中に説かれていることによつて知られます。

私の迷い心で作った信心なら、迷いの元にはなりません。他力回向の真実信心だから、私の信心が仏因となりうるのです。「信心」とは、文字通り心に起ります。そこに自らの心のはたらき(意業)が関わると、他力の真実信心にはなりません。そこで、「よび声」の仏となられ、そのよび声を聞いて、それがそのまま信となる「聞即信」こそが「心の領域にありながら心のはたらきをさせない」先手のよび声によつて成立する他力回向の信となるわけです。

### 信心は、救いが届いた証し 逃げる私を追いかけ、よび声

せつなく阿弥陀さまから届けられても、それに気づかなければ、何の意味もありません。立派な船が出来上がっても、乗らなければ岸に渡ることができません。しかし、船に乗ることが私の仕事になると、それは「条件」となります。親鸞聖人が、生死の苦海ほとりなし

ひさしへしつめるわれらをば 弥陀弘誓のふねのみぞ のせてかならずわたしける (同57頁)

と詠まれるように、阿弥陀さまの弘誓の船は「乗せて」くださるのです。しかし私たちが「乗りたくない」と逃げ回っています。それを、阿弥陀さまは追いかけて続け、ついに、くるめとつてんたいします。それが「撰取不捨」(もの逃べるを追はへん)と 同57頁脚註)のお心です。

月かけのいたらぬことほなれども ながむる人の心にぞむと ありませぬ。夜になれば日が沈み月が顔を 出します。雲がなければ、東京でも大阪でも、日本中いや世界中どこからでも、月を見ることができます。しかし、それを愛する心があつて、初めてその人に意味を持つのです。阿弥陀さまの救いが届いていても、それを他人事のように無視し拒絶したので、その人には意味を持ちません。阿弥陀さまの救いが、私に届いた証しが「信心」であり、そこに初めて「仏因」が語られるのです。

(次回回は「称名報恩」)

## シリーズ堂々完結! 第六巻ついに発刊

第一巻から第五巻までの収録内容を補完する 典籍・史資料集。法然聖人の著述・法語、親鸞聖人を中心とした系譜、本願寺成立に関わる文書等を収載。

1,564頁/本体 6,500円+税

### 最新刊 第六巻 補遺篇



既刊

全巻 B6 変型判上製/函入

第二巻 宗祖篇上 1,214頁 本体 5,000円+税 『顕浄土真実教行証文類』『三帖和讃』など、宗祖親鸞聖人の著述を収載。

第四巻 相伝篇上 1,566頁 本体 6,500円+税 宗祖の教えを伝える、覚如上人の『報恩講記』や存覚上人の『浄土真要鈔』などを収載。

第一巻 三經七祖篇 1,428頁 本体 6,000円+税 浄土教の根本聖典である『浄土三部經』及び七高僧の著述を収載。

第三巻 宗祖篇下 1,210頁 本体 5,500円+税 『阿彌陀經註』『西方指南抄』などを収録。前巻とあわせて宗祖の著作を網羅する。

第五巻 相伝篇下 1,456頁 本体 6,000円+税 浄土真宗中興の祖・蓮如上人の『御文章』を含む著書や言行録、さらには関係聖教を網羅する。

浄土真宗の根本と伝統 — 先師の歩まれた道が明らかになる

# 浄土真宗聖典全書

### 最新刊 第三巻

幕末維新期から昭和初期までの 動向を詳述。 近代における本願寺教団の組織 改革、国家との関係、部落問題な どの民衆史を網羅。 A5判/744頁/函入 本体 5,000円+税



## 増補改訂 本願寺史

親鸞聖人750回大遠忌を機縁として、これまでの研究成果を 反映させ、半世紀ぶりにより充実した形で再編纂した増補改 訂版。本願寺史料研究所 編

第一巻 親鸞聖人のご生涯から戦国時代末期 までの中世における本願寺教団の成立 とあゆみ。 A5判/626頁/函入 本体 5,000円+税

第二巻 安土・桃山時代から江戸時代末期ま での近世における本願寺教団のあゆみ。 A5判/726頁/函入 本体 5,000円+税